

第13回国際音楽学会 (SIM) の報告

A Report on the 13th Congress of SIM
(Societe Internationale de Mnsicologie)

大谷 紀美子

昭和57年8月29日から9月3日迄の6日間、フランス北東部、アルザス地方にあるストラスブール大学で、第13回国際音楽学会が開かれました。この学会はスイスに本部をおき、5年に1回会議が行われます。前回は、アメリカ、カリフォルニア大学バークレー校でありました。本来、この学会は“音楽学”つまり、西洋の芸術音楽研究、特に歴史的な研究の場として始まり、ずっと続けられていましたが、バークレーの会議から少し変化がみられるようになりました。バークレーでは、西洋と東洋の比較、音楽を西と東との対比においてとらえるというのがテーマとなり、初めてアジアやオセアニアの音楽が研究・討論の対象となりました。それに続いて今回は“音楽と儀礼——聖なるものと俗なるもの”——というテーマで、特定の地域や時代に限定せず、音楽や舞踊の研究・討論を行ないました。

6日間の会議は、12のラウンド・テーブル、5つの共同作業グループと自由な個人の研究発表で構成されていました。そして、毎夜、音楽会が催されました。午前、午後共に、いつも4つから5つのセッションが並行して開かれていましたので、1人の出席可能な数はほんの1部に限られてしまいます。

会議は英語・ドイツ語・フランス語の3ヶ国語が公用語でした。前回のバークレーの会議では主催国の関係で、英語が大きく巾をきかせていて、ヨーロッパからの研究者達も英語で討論した人が多かったのですが、今回は、3ヶ国語がほぼ同じ程度に用いられていました。セッションによっては、ドイツ語のみのも、フランス語のみのももありました。パネリストの中には、フランス語のペーパーの前に英語の要旨を読む人、ドイツ語で進行しているセッションに、会場からフランス語で意見を述べる人などがあって、少くとも“聞くこと”だけは3ヶ国語に通じていないと討論の展開を理解するのは難しいでした。発言は自分のもっとも得意とする言語で行えば大方の人は理解してくれるようです。

さて、次にどのようなテーマで研究や討論が行われたかについて少し述べます。

◎ラウンド・テーブル

- (1) 宮廷音楽：手段と力のシンボル
- (2) 民俗的な祭りとの相互作用
- (3) 宗教的権威の芸術音楽に対する理想的な形と、音楽の発展に対する影響
- (4) 1750年から1870年次のフリーメーソン及び革命的・帝国主義的なブルジョワの音楽祭礼
- (5) 儀式音楽及び舞踊の変化と機能の変遷
- (6) 儀式音楽における声楽と器楽の演奏：矛盾と一致
- (7) 今日の音楽演奏の儀式化
- (8) キリスト教儀礼、特にラテン教会からの音楽形式及びジャンルの由来の過程
- (9) 18世紀から19世紀への移行におけるオペラの儀式的な様相
- (10) 儀礼的演奏としての宮廷バレエ、劇場祭礼及び仮面
- (11) 聖なる行事と俗なる行事における舞踊・音楽・儀礼の位置
- (12) 15世紀ヨーロッパにおける聖なる祝祭と世俗的な祝祭

それぞれのテーマから想像がつくように、地域を限定しないといっても、ヨーロッパが中心となっていることは否めません。個々のテーマは、狭い意味に限定されたものと、漠然とした大きな範囲のものがありました。

ラウンド・テーブルの(3)では、カトリック、プロテスタントの両キリスト教、仏教、ユダヤ教からそれぞれ1人づつの代表が出席して討論が行われました。イスラム教の代表者は、ペーパーを送ってきただけで、当日は欠席でした。仏教の代表として、京都芸術大学の片岡義道氏がパネリストとして出席しておられました。討論は1人をのぞいてすべてドイツ語で行われました。勿論、片岡氏もドイツ語でした。この場合、キリスト教からは新・旧それぞれ1名のパネリストが出ていたのに対して、仏教からは1名しか出席できなかったことは、少し問題を残しました。というのは、キリスト教は新・旧いづれにせよ、ヨーロッパのパネリスト及び聴衆には一般的常識として多くの知識があり、また、キリスト教の音楽にも馴じみが深いのですが、仏教の音楽に対する知識はおろか、仏教そのものに対する知識も充分でない、いわばアンバランスの状態での討論はしばしば、うまくかみ合わないことがありました。その上、片岡氏一人で、日本の仏教諸宗派の儀礼音楽から、中国、東南アジアの教義の上でも、音楽的にも大きく異なる仏教すべてを代表することは、不可能でした。ラウンド・テーブルの司会者は、スイスのクルト・フォン・フィッシャー氏で日本にも来られたことのある方でした。日本で行われる多くのラウンド・テーブルよりは時間が少し長いかもしれませんが、3時間という制約がある上、フォン・フィッシャー氏の性格にもよるのでしょうか、1つの点を取り上げ、この点について各宗教ではどうなっているか、とか、こういう事はそれぞれの宗教にあるかないか、という議論の進め方をされたので、イエスカノーの返答が単純に出来ない場合、議論がかみあわないことになりました。つまり、前述したように、仏教に対する一般的知識を欠く人々、或いは少い人々に、安易に、イエスカノーで答える事を避けられたのでしょうか、まず背景を説明

し、その上で返答しようとした片岡氏に対しては、時に質問に対する返答に至らない前に、発言を次のパネリストに譲らねばならないという事がおこりました。これは、ヨーロッパの人々と日本人我々の討論に対する態度の違いが少なからずあらわれていたのかもしれませんが。しかし、度々、キリスト教の代表として出席されたパネリストが、司会者のこの質問に対する返答は皆がよく知っていることだから、と質問をパスされ、時間を譲っておられ、余り知られていない他の宗教に少しでも多くの機会を作ろうとしておられました。会場の聴衆の中から、長年チューリッヒ大学で教えておられる前田昭雄氏が、片岡氏の発言を助けるような、又は、補強するような形の発言もありました。余りに巾の広いテーマの場合、パネリストの選考の際の専門領域の配分の難しさを提した感がありました。内容的には、特に新鮮なものではなく、それぞれの立場の披歴に止まっていたようでした。

ラウンド・テーブルの中には、パネリストの数が多すぎて、それぞれが自分の研究を発表しただけで、何の討論も行われなかったものもありました。これは1年ほど前に、ラウンド・テーブルのテーマが会員に発表され、会員は参加したいテーマにパネリストとして申し込むことが出来るようになっていきます。従って、希望者を可能な限り受けつけようとするところのような事になってしまうようです。

1つのテーマに対して、異なる地域、或いは異なるジャンルからの実例をひいて討論するというのが、特に民族音楽学とよばれる分野に多くありました。しかし、この場合も、単なる事実の説明が比較に終わってしまい、なかなか議論がうまく発展することは難しいようでした。ラウンド・テーブル(2)や(11)なども、個々の発表は興味深いものがありましたが、討論の時間が短かすぎたり、まったく失くなってしまったりで、個々の事例を聞くにとどまってしまった事は残念でした。

◎共同作業のグループ

- (1) ブライトコプフのマニユスクリプトのコピー
- (2) グレゴリオ聖歌の版本
- (3) 19世紀フランスの未調査のアルヒーフ
- (4) ペルゴレージ研究の現在の状態と新ペルゴレージ版
- (5) 音楽学におけるデータの根拠

以上でしたが、私の専門領域と余りにもかけ離れたものや、また、聞きたいと思っけても、他のラウンド・テーブルなどと重なってしまったりで、残念ながら、1つも出席出来ませんでした。従って、どのように議論が行われたのかも不明です。(1)には、桐朋学園大学の大崎滋生氏が参加されていました。

◎個人の研究発表

第13回国際音楽学会（S I M）の報告

パークレーで行われた前回は、すべてラウンド・テーブルで、個人の研究発表が全然ありませんでした。しかし、これは、かなり不評のようでした。それで今回、復活したようです。研究発表は、統一テーマとは関係なく自分でテーマを選ぶことが出来ます。セッションは9つあり、それぞれ5つから6つの発表がありましたから約50はあったと思われます。扱われたテーマはやはり西洋芸術音楽が圧倒的多数でした。私は自分の専門が西洋芸術音楽ではありませんので、それらについてはプログラムによって知るのみで、どうしても、それ以外の発表の方に行かざるを得ませんでしたから、実際に聞いたものからのみの報告ですから、大勢とは異った、偏ったものとなってしまいます。中には、音楽のセミオロジーを扱った発表、インドの音楽、パプア・ニューギニアの音楽、ラテン・アメリカのオペラにみられる土地の音楽の慣用など、内容的にかなりヴァリエティーに富んでおり、質的にも相当様々な段階があったように思われました。特に目立ったのは、アメリカ人の発表者が多かった事です。

◎演奏会

演奏会は、期間中、毎夜あちこちの会場で行われました。第一夜は、天台声明の四箇法要が、片岡義道師以下、滋賀県の西教寺の僧侶達によって行われました。会議全体のプログラムに、仏・英・独語で、声明に関する簡単な解説が書かれていました。

第二夜は、バーデン＝バーデンの放送管弦楽団による演奏でした。曲目は、ブルーゼの“典礼”、ドビュッシーの“神聖な舞曲と世俗的な舞曲”とストラヴィンスキーの“春の祭典”で、選曲にも、この会議の統一テーマがあらわれていました。

第三夜は室内楽でした。演奏はアルベール・ルーセル・トリオで、20世紀初頭の作曲家、ルーセルやジョルジュ・ミゴの作品とアンドレ・ジョリベの3曲が演奏されました。ミゴの作品は、“Trioacordes”というので、マルク・オネガーの編集した楽譜が前もって参加者全員に配られました。

第三夜はバロック音楽のコンサートでした。ジェームス・タイラーの率いるロンドン・アーリー・ミュージック・グループによる演奏でした。プログラムは4つに分かれ、Iは、1600年頃のイギリスの音楽で、ダウランドやモーレー等の作品でした。IIは1600年から1615年のフランスの音楽でした。IIIは1647年のドイツの音楽でシュッツの作品、IVは1618年から1650年のイタリアの音楽でクラウディオ・モンテヴェルディの作品などが演奏されました。この演奏会は、市内のサン・ピエール＝ル＝ジュンヌ教会で行われました。

その他の行事としては、会議の半ばに1日バスでの遠足がありました。コースは3種あり、好きなものを選びます。1つは北部へ、もう1つは南部、そしてもう1つはいくつかの教会のオルガンを見学するものでした。私は2番目のコースに参加しましたが、コルマルでビブリオテークを見学し、教会でオルガン演奏を聴いたり、帰りには、アルザス地方のワインの醸造を見学しました。（写真1参照）バスのガイドはフランス語と英語、ドイツ語で説明をします。

アルザス地方は、何度もドイツ領となったり、フランス領となったりしたという歴史のある所ですから、多くの人々が両方を話します。現在は、フランス領ですから、若い人々の中にはフランス語しか話せず、ドイツ語しか話せない、おじいさん、おばあさんと家族の中でも話が通じないという問題が起っているそうです。街中のレストランではほとんどメニューは2ヶ国語で書いてあります。アルザス方言と言って、フランス語の中にドイツ語の単語を混ぜたり、時にはドイツ語とフランス語をくっつけた合成語まであるようです。郵便局や駅などに“ドイツのお金は使用出来ない”という張り紙が必要なほどドイツ貨幣を使おうとする人が多いことは、国境近くの街らしい特徴、そして両国の人々の付き合いの深さを意味しているのでしょう。

ストラスブールは美しい街です。以前、大学は街中にあったそうですが、何処も同じ、キャンパスが手狭まになったので、少し市中を離れたところへ移ったの



写真1 日本からの参加者達 遠足の時に

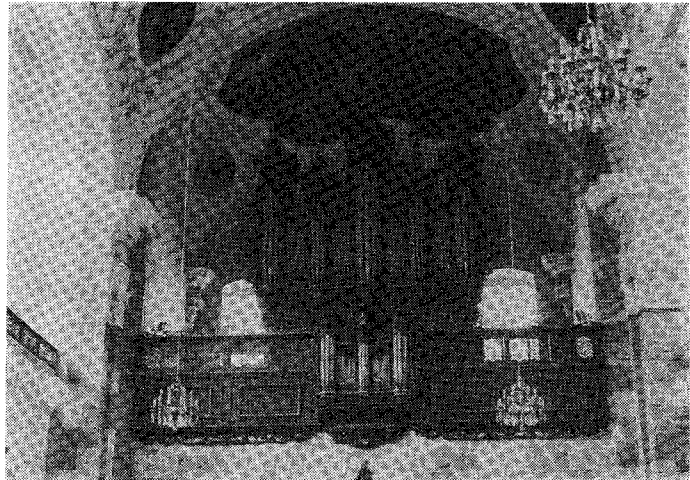


写真2 Ebersmunster のオルガン

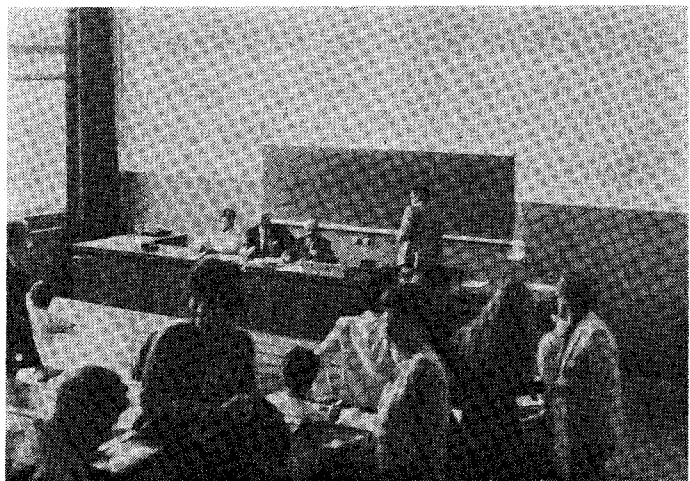


写真3 研究発表風景

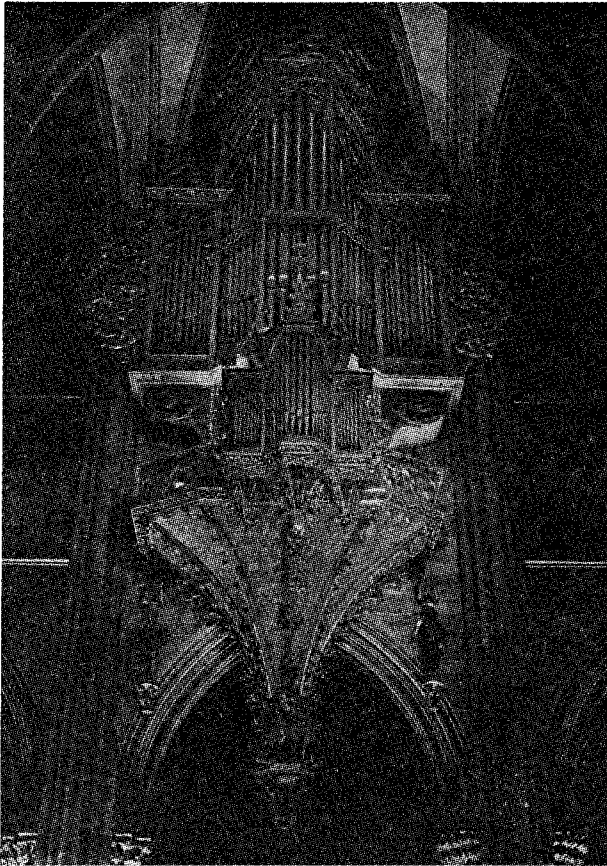


写真4 ストラスブール大聖堂のオルガン

だそうです。離れたといっても、30分から40分、散歩がてらにブラブラと歩けば、市の中心、有名な大聖堂に行ける位ですから、さほど遠くなったわけではありません。大聖堂のオルガンは残念ながら、私の行った時には演奏されていませんでしたし、大きくて暗い教会内部はよく見えませんでした。あちこちからの観光客に混って、混雑した絵ハガキ売場でオルガンの写真を見つけました。（写真4参照）街中のキレイな喫茶店でお茶を飲んでいたら観光客をのせた、一見、トロッコの様な観光バスが走っていました。また街中をいくつかの運河が通っており、観光客船が時々みられました。

学会への参加者は、ヨーロッパ各地、アメリカ及びアジアからありました。参加者数ははっきりと

はわかりませんが、事前に登録した者の名簿をざっと数えただけで、約560人はありました。それらの人々が大学の寮や、市内のホテルに分散して宿泊していました。日本からの出席者も15名以上あったようです。この他、ユネスコ主催による“音楽の世界史”というグループがこの期間中、度々会議を開いていました。このグループには、パリ在住のヴェトナム人学者、トラン・ヴァン・ケー氏や、岸辺成雄氏がはいておられ、遠足の日も、終日、会議を開いていたようでした。5年後の第14回は、イタリアのポローニャで開催されることに決まりました。

最後に、私の今回の参加に対して、相愛大学父兄会より御援助いただきました事を報告するとともに、父兄会に対して深く感謝の意を表し、厚く御礼申し上げる次第です。